

開かれゆくキャンパス 2

「21 世紀の商店街」

シンポジウムの開催にあたって

センター副所長 田上竜也

今日さまざまな大学が、周辺地域との連携を深める取り組みを行っています。慶應義塾大学日吉キャンパスもまた、横浜市民講座、極東証券寄附講座などを通じ、地域住民との交流を図ってきました。さらに教養研究センターの交流・連携セクション創設をきっかけとして、日吉商店街と提携したイベント企画 HIYOSHI AGE が開始されるなど、近年新たな動きが生まれています。大学と地域との連携は、大学の「知」を地域に開放することによって市民の文化的要望に寄与したり、また研究教育と生活の調和した街づくりに共に知恵を出し合っていくなど意義深いものです。さらに学生にとっても、大学の立地する地域を、単に生活したり消費する場所と捉えるばかりではなく、当該地域について調査・研究したり、学生街としての文化を創出しようと試みることは、きわめて魅力的な作業といえましょう。日吉商店街は日本の他の商店街と同じく、交通問題、高齢化、組織の分裂、チェーン店・大型店の乱入など多くの問題を抱えていますが、これらの問題の検討とその改善案の作成は、とりわけ「実学」を旨とする慶應義塾の学生に好個の研究材料を提供している、といって過言ではありません。

以上の目的から、2004 年 4 月より商学部設置総合教育セミナー「21 世紀の商店街」が開講され、通年にわたり日吉商店街および他地域の商店街を研究してきました。セミナーは商学部・経済学部の 4 教員（小瀧昭夫・石井明・牛島利明・田上竜也）が共同で運営し、学生は担当教員毎に 5 人から 7 人のグループに分かれて個別の課題についての調査・研究を行い、その成果は最終プレゼンテーションおよびレポート集の形にまとめました。

こうした研究成果を報告するとともに、地域・行政代表の方々や専門研究者を交え商店街の未来について意見を戦わせるべく、「21 世紀の商店街シンポジウム」が企画され、慶應義塾大学教養研究センター行事「開かれゆくキャンパス」第 2 弾として、2005 年 1 月 18 日(火)16 時半より慶應義塾大学日吉来往舎 1 階シンポジウムスペースにて開催されました。来場者は学生を中心に 100 人近くを数え、日吉商店街や地域住民の方々、横浜市や港北区の行政関係者にもお越しいただきました。シンポジウムは前半の学生発表と後半のパネルディスカッションの 2 部構成で行われ、特に後半には活発な質疑応答が交わされたこともあり、当初 2 時間半の予定が 30 分近くも延長されるなど、盛況を博しました。このシンポジウムの経験が参加した学生にとって大きな財産となったことはもちろんですが、大学と地域との関係を強化していく礎石ともなる有意義なものでした。ここにあらためてシンポジウムにご参加いただいた皆様にご心より感謝申し上げます。



第1部 学生発表：若い視点と発想による地域活性化への提言

シンポジウムの前半部は、担当教員毎に4グループに分かれた学生発表および質疑応答によって進められました。これらの発表は、もともと各グループ1回1時間半の授業の枠を使い全員参加した発表の内容を、シンポジウム用に各グループ15分に縮約し、それぞれ1、2名のプレゼンターを立てて行ったものです。発表に続く質疑応答では、日吉以外の例として挙げられた商店街の組織について、また地域活性化に関する大学や学生の活動の実態についての質問が寄せられました。以下に掲載するのは、基本的に学生の作成による発表要旨です。

石井班発表

「街のなかの商店街～事例から学ぶ商店街活性化の本質～」

商店街活性化には「街づくり」という観点から政策を立てていくことが重要である。ここでいう「街づくり」とは、商店街を単にビジネスの場として捉えるのではなく、本来商店街に備わっていたコミュニケーションの場としての機能も重視して、街のあり方を探っていくことである。さらにコミュニケーションについては、商店と地元の人々との交流のみならず、商店間、商店街間、商店と観光者間、など多様な視点から考察しなければならない。商店街がコミュニケーションの場として機能することにより、地元の人々、商店街、来客との間にコミュニティが形成され、街全体が活性化していく。

私たちは商店街のタイプを大きくふたつに分けて研究を進めてきた。ひとつは、首都圏に商業基盤を置いている都市型商店街。もうひとつは、地方に商業基盤を置いている地方型商店街である。商店街の活性化事業については、主に後者が積極的に売り物を作って行っているケースが多いようだ。例えば、地方型商店街の富士宮は「やきそば」、酒田は「アイドル」、水戸は「アート」によって地域活性化をはかっている。一方、都市型商店街の巣鴨、武蔵小山は、特に大々的な活性化事業は行っていないが、とても賑わいのある商店街を形成し

ている。その要因として挙げられるのが、これらの商店街では団結力や街づくりに対する共通意識が強く、コミュニケーションの場が機能していることである。その結果人々が集まってくるようになり、商店街内の意識もますます向上する、という正の循環が生まれている。このように商店街活性化のためには、「街づくりに対する共通意識を持ち、コミュニケーションの場を作り、コミュニティを形成して人々の輪を広げていく」という考えが重要である。

活性化というと、とかく商店街の売り上げ増加などすぐに数字に表れる、「ビジネスとしての活性化」に目がいきがちだが、コミュニケーションを向上し、コミュニティを形成しながら「街」を作り上げ、人々を集めていく、という考え方がこれからの商店街には必要だろう。

小瀧班発表

「大学と商店街」

私たちは「大学と商店街」の関係をテーマにし、さまざまな切り口から調査を行った。大きく分けて慶應義塾大学と日吉商店街(「ひょうら」)の関係の調査と、早稲田大学と早稲田商店会の関係の調査を行い、その過程で大学が商店街にどのようにかかわることができるのか、ということを考察してきた。今回の発表では、日吉の商店街に絞ってプレゼンテーションを行った。「HIYOSHI AGE 2005」という慶應義塾大学と日吉商店街の協賛イベントに実際に参加した経験から、このイベントのねらい・当日の様子・イベント後の効果などについてアンケートを実施したその調査結果である。

アンケートの結果から、まず商店街と学生側との考え方の違いを強く実感した。商店街が目指すものと学生が目指すものとの間に少しギャップがあること、また日吉の地域住民を日吉商店街に引き付けるにはまだ何か不足していることを感じた。これらから日吉の商店街を舞台に大学と商店街が協力して活性化事業を進めるにあたり何が必要かを考えた。まずは大学側、商店街側の双方にしっかりとした組織の存在が必要不可欠であろう。大学側と商店街側が意見交換をする場を設けることで、よりよい活性化事業が可能となる。また、「HIYOSHI AGE」というイベントを継続して行っていくことも重要である。定期的イベントを行うことによりイメージを定着させ、日吉の地域住民やその他の地域の人々が日吉に足を運ぶ機会を作り出し、皆がコミュニケーションをはかる場ができれば日吉の商店街の活性化につながるだろうと考える。



現在、全国各地で大学と商店街が協力して活性化事業を行っている例があるが、日吉の商店街と慶應義塾大学の活性化事業もそのひとつとしてこれから注目されるようにぜひ継続してほしい。「大学と商店街」というテーマを研究してさまざまな形の活性化事業を知ることができたとともに、私たち大学生でも地域のために何かできるのだということがわかり、学生の考えも商店街のこれからにつなげていくことができればと思った。

田上班発表

「HIYOSHI 2009 ~ 日吉未来都市計画 ~」

私たちは、日吉商店街を研究対象として「HIYOSHI 2009」というプロジェクトを進めてきた。慶應義塾大学学生の多くが実はあまり知識を持っていない日吉商店街について調べていくうちに、近い将来、市営地下鉄延伸をはじめとして日吉に大きな変化が訪れることがわかった。それならば研究を開始した2004年から5年後の日吉の街を、私達の提言によって想像 = 創造していけばおもしろいのではないかとということで、このプロジェクトはスタートした。

プロジェクトでは交通・景観・エコロジー・コミュニティ・交流・組織と、班員が各自興味を持ったテーマを選択し、現状分析と未来への提言を行った。その集大成として「日吉学生委員会」という委員会を構想し、実際に設置した。この委員会は、学生ならではの視点で日吉の街を分析し、大学と商店街の相互の利益をその運営理念として独自の研究・企画・提言を行っていく団体である。他地域でも学生を中心に組織された団体が行政や地域と協力して街づくりを行い、成功している例があるが、その日吉への応用といえる。

学生委員会の設置により、大きな利点が3つ生まれると考えられる。1点目は商店街と大学の仲介役を果たすこと、2点目はマーケティングの効率化が可能となること、そして3点目は継続的な提言や活動ができることである。従来、慶應義塾大学と日吉商店街の公的な交流はあまり見られなかった。近年では「HIYOSHI AGE」がその一部を実現してはいるものの、商店街と大学を繋ぐ架け橋が欠如していることは否めない。この委員会はその役割を果たそうとするものである。また、学生の視点から商店街利用者のニーズを調べることで、各店舗は効率的なマーケティング活動を行うことができるようになる。さらに日吉学生委員会という常設組織を作ることによって、イベントや企画を単発で終わらせるのではなく、継続的な提言や活動が可能となる。具体的には定期的なイベントの開催、日吉ポータルサイトの運営、広報誌やガイドブックの作成などの活動を通して、学生の側から日吉の街の発展に貢献できると考える。

牛島班発表

「商店街の組織と意識 ~ 日吉商店街はなぜ活性化しないのか ~」

商店街の活性化を私たちは「個人経営店の繁栄」と定義した。なぜなら、商店街を構成する個人経営店よりチェーン店が大きな勢力を持っている場合、どこも同じような商店街になってしまうからであり、各々の商店街らしさというものは個人商店から生まれてくると考えるからである。この研究にあたって、大学に隣接する日吉商店街の重要な顧客である学生、日吉商店街を構成する店舗、組織に関わる理事の3本を柱とし、文献によらず実際の声をもとに調査を行った。

学生に対して行ったアンケートでは、現実の日吉商店街とは異なり、チェーン店で埋め尽くされた商店街というイメージを抱いていることがわかった。そこで学生の持つイメージと現実とのギャップを生み出す原因や問題点を、店舗と理事への調査から探り、商店街活性化への改善策を考えた。

店舗に対する調査では、組合組織に加盟していないことや帰属意識が低いこと、組合が形骸化しているということがわかった。また、日吉商店街の好きなところ、嫌いなところについては、多くの店舗から「なし」との回答を得て、店舗がいかに商店街に対して無関心であるかがわかった。理事に対しては組合の現状やリーダーについて伺ったが、運営がうまくいっていないのが現状のようだ。

日吉商店街が抱える問題点として、組織・リーダーをめぐる悪循環が存在することが挙げられる。強力なリーダーが存在しないため組合がまとまらない 加盟してもメリットのない組合をつくってしまう そのような組合には加盟したくないので加盟数が減少する 会費を集めることが困難になる 組織や商店街の運営に支障をきたし、リーダーや組合のやる気・組合の団結力も低下する、という悪循環である。この悪循環をどこかで断ち切って組織が変化するならば、よりよい街づくりに対する自覚が芽生え、街の雰囲気は向上してより多くの集客が可能になるだろう。すなわち、店舗の意識の変化は商店街への関心をもたらし、自分の店舗を輝かせようとの意欲が生まれてくるはずだ。これがわれわれの考える商店街の活性化である、「個人経営店の繁栄」を可能にする。



第2部 パネルディスカッション：大学は地域に貢献できるか？

第1部の学生報告からも明らかのように、「21世紀の商店街」セミナーに参加した学生の積極的な取り組みは担当教員一同の予想を越えるものであり、調査やインタビューなどをふまえた各グループのオリジナルな議論は、我々教員にとっても刺激となった。「21世紀の商店街」の試みは、開設初年度にして大きな教育成果をあげたと評価できるだろう。

しかし、他方で、大学における地域貢献の一環として考えた場合には反省すべき点も多い。その一つは、担当教員の側において、学生の研究・活動の成果を地域にフィードバックしようという意識が必ずしも明確ではなかったという点である。

そもそも、少なくとも日吉・三田キャンパスに関する限り、地域社会の一員としてどのような役割を果たすべきなのか、という問題は、これまであまり真剣に議論されてこなかったようにも思われる。そこで今回のパネルディスカッションでは、「大学は地域に貢献できるか？」というテーマを設定し、地域・行政・大学、それぞれの立場から地域活性化に取り組みされてきた3人のパネラーをお迎えして、大学の地域貢献のあり方についてご意見をいただいた。

各パネラーのご意見からは、慶應義塾に対する大いなる期待を感じると同時に、現在義塾が有する人的資源や施設を利用すれば、すぐにも実現可能な地域貢献プランも多くあることをあらためて認識させられた。また、当日の会場には、それぞれ独自に地域に関わる活動を行っている学生が多数参加してくれたことも新鮮な驚きであった。今回のパネルディスカッションを通じて、地域活性化に関心や責任を持つ人々(学生・教職員・地域住民・行政担当者)が継続的に対話し、具体的な活動や成果へと結びつける場を創りあげることが、慶應義塾にとっての今後の課題であることが明らかになったように思われる。

牛島 今回のシンポジウムのテーマは「大学は地域に貢献できるか」です。現在、全国で大学と地域が連携したさまざまなプ

ログラムが実施されています。また、学生からの発表にもありましたように、学生が自主的にキャンパスを出て商店街の空き店舗を活用した企画を立てたり、イベントを行ったりと地域の活性化へ貢献をし始めています。慶應義塾大学でも、今回のシンポジウムを開催するきっかけとなった商学部総合教育セミナー「21世紀の商店街」の開設をはじめ、2003年度には日吉商店街とのインターン制度を試みました。また一昨年より「HIYOSHI AGE」という学生と地域の共同イベントが行われています。

こうした地域での活動は、大学側からすると通常の授業とは異なり、学生に地域というフィールドで具体的な問題意識をもって実践的に学習する機会を提供できるというメリットがあります。そのため、学生の学びに対する意欲に大きく反映され実際に効果的だと言えるでしょう。しかし、このような試みを大学における地域貢献活動として考えた場合、その成果についての評価や、問題点・改善点についての議論はまだまだこれからというところではないかと思えます。

今回のパネルディスカッションでは地域、行政、大学それぞれの立場からおひとりずつ参加していただきました。パネラーの皆様には、それぞれのお立場からの意見を交えディスカッションを行いたいと思います。

熊井 私は、これまで日吉商店街の理事等を務めてきました。日吉商店街には「日吉商店街協同組合」、「飲食店同業組合」といった組合組織があります。このほか「通り会」という組織があり、これは主に街路灯の維持を目的に集まっています。

ここでは、日吉商店街の現状についてお話ししたいと思いますが、どうも「21世紀の商店街」というほど良い話が出てこないのが現状です。まず、日吉商店街はさまざまな形態の商店街がある中、地域密着型と言われます。そして、ターミナル型やショッピングモール型と比べ、楽しみに欠ける面があります。そのためか、店舗やお客が減少する傾向にあります。ま





熊井憲一氏

た、大手のフランチャイズチェーン(FC)が増えてきました。こうしたFCは組合に参加していただけないことが多い。すると、徐々に会員が減り街路灯やアーチの維持ができなくなり、商店街の売上が落ちます。よって、今後はFCが組合、通り会に参加する工夫が必要になります。そして、購買

者の変化です。商店街は専門家の集まりですから、商品が多くなるとも売り手の知識が豊富なため、商品の説明を交えながらお客に満足のいく買い物をしてもらっていました。ですが、いまはその必要がありません。お客は自分たちで商品知識を仕入れ、種類が豊富な大型店舗へ買いに行くようになりました。

また、以前は青年部を中心に商店街の活性化を試みましたが、後退とともに若手が少なくなっていました。最近「HIYOSHI AGE」というイベントを学生たちと行ってはいますが、商店街側で動く者が少ない。だれかがやってくれるだろうという考え方が増えてきました。

やはり商店街としては、地域住民の方に「ここでも気持ちよく買い物ができるんだ、十分に生活できるんだ」と思っていただけの街をつくりたい。そのためには大学、学生、地域住民、商店街が協力し合い、行政がそれをバックアップする態勢が必要だと思えます。

そして、取り組みを継続的に続けることが大切です。継続することで、日吉に面白いファッションが根つき、オリジナリティが生まれると思います。日吉には課題が多くあります。ですから、活性化するにはやりがいがある場所だと思っていますので、まちづくりに協力していただければと思います。

宮崎 私たちは、商業集積地の振興を支援する仕事をしています。まず、商店街は商品、サービスを通じて市民、地域の暮らしを支えていく役割、また交流を生む画期的な役割を担っていると思います。商店街には日常生活を支える地域型・近隣型、新しいライフスタイルを提供したり、情報発信、都市のにぎわいを演出する都市部に立地する広域型があります。そして現在、地域型・近隣型の商店街の多くは衰退の一途をたどっています。この原因としてライフスタイルの変化、郊外型のショッピングセ



宮崎孝雄氏

ンターの出現があります。また、地域型・近隣型の商店街の理事や会長に悩みを聞いた結果、高齢化、後継者の問題が大きな要素となっているようです。統計からは、空き店舗の比率が増えてきていることが判りました。

こうした商店街の活性化施策として、商店街で共同施設を設けて買い物環境の向上を図ったり、イベントを実施したり、空き店舗への誘致施策が採られています。行政は、2004年度から商学連携支援事業に取り組んでいます。これは、商店街と大学が地域活性化を目的とした共同事業に取り組む場合に、その3分の2にあたる金額(最大50万円まで)を助成するものです。このほか、商学連携ネットワークといって、大学と商店街とのニーズを結びつけていくためのネットワークを2004年9月に設けました。現在、商店街の方をはじめ市内大学や専門学校の先生等にご協力をいただいています。こうしたネットワークを通じて、大学と地域が相互の利益につながる取り組みを生んでいけたらと思います。

平田 私は企業に勤めた後、東海大学のゼミにて5年半、学生とともに秦野市、相模原市の商店の活性化、提言を行ってきました。

まず、秦野市のケースでは、市と東海大学が提携を行っていたことが活性化への一助になったと思います。単に研究会としての活動ではなく、大学全体として活性化に取り組むことができました。本学には建築学科、芸術学科、経営学科などがあり、これらの学部をはじめ産能大の学生も一緒に、都市設計といったハード面、イベントやネットワークといったソフト面の両方について提言を行うことができました。



平田光子氏

また、相模原市のケースでは、ベンチャービジネスコンテストを通じて相模原市を活性化させるビジネスプランの提案をしました。このほか、行政主催で、若い世代の起業家の育成を目的に「こどもアントレ」を実施しました。これはプランニングから資金調達、実施まですべて学生が行いました。

こうした試みがある中、大学は地域にどう貢献できるのでしょうか。大学にはお金がありませんが、それ以外のものは全てあります。研究室をはじめとする場所、幅広い年齢層で構成される知識や感性、大学の先生や学生の多彩な人脈。こうした大学の良さを地域の方にも活用していただきたいと思えます。

また、大学と地域が連携することは学生の教育においても重要です。学生にとってキャンパス外の活動は、責任感や社

会に対する意識を養うことにつながります。また、キャンパスの中では気づかない自分の良さを発見することもできます。大学にとって地域での活動は、まさに全人教育そのもの。地域での実践を通じて、自分を実際に磨いていくことが今後の大学教育に求められます。

牛島 これまでのお話から、大学と地域の連携には「継続性」が大切だと分かりました。ですが、学生は4年間で卒業する、教員は通常の授業と異なる負担を負うことからどうしても息切れする傾向にあります。こうした中で「継続性」をどう生むかが、大きな課題だと思いますがいかがでしょうか。

平田 私自身も昨年、大学を移った際に継続性の課題を抱えました。私は、この課題について言えば「行政」が重要な役割を担っていると思います。商店街の方にとっては大学へ相談に来ることは敷居が高いうえ、時間がない。一方、行政の方は大学の先生方と密な関係があります。またコーディネート、コントロールする調整力があると思います。このような行政の力は大学と商店街の継続的な関係に欠かせません。

牛島 東海大学は市と全面的な協力態勢にあるようですが、横浜市の場合はいかがでしょう。

宮崎 横浜市の場合には商店街の数も多く、個々でさまざまな取り組みがされています。私たちは、それらを幅広く支援をしたいと思います。それぞれを成功に導くには、商店街の方が自主的な取り組みを続けられることが重要となります。横浜市は、平田先生が言われるコーディネーターとして、商学連携ネットワークを生かしたニーズマッチングすることをベースに商店街を支援していきます。

熊井 商店街では、コンサルタントにまちづくりのプランニングをお願いしたことがあります。そこで実感しましたが、行政に

報告するための分厚い資料だけでは継続的に進まないんです。継続性のある街づくりは地域住民、商店街が主体的に取り組み、その中でアドバイザーとしてコンサルタントがいなければなりません。また、街づくりについて大学、地域、行政で勉強会ができれば嬉しい。そこでは商店街にかかわらず、地域全体の活性化について話すことができると思います。そして、これには大学の開放が求められると思います。

牛島 なるほど。たとえば、これまでコンサルタントがいた位置に、大学の教員や学生を置くことも一案ではないでしょうか。単に調査や提案を行うだけでなく、出来上がったプランを学生が形にしていく。これができるのは大学ならではの強みではないかと思います。また、大学も地域も継続的に交わる場があれば地域への取組みはこれまで以上に増えますよね。

それでは、本日はありがとうございました。

PROFILE

司会：牛島利明(慶應義塾大学商学部助教授)

熊井憲一(くまい・けんいち)

日吉商店街協同組合専務理事・(株)日吉家具センター代表取締役。
「HIYOSHI AGE」をはじめ商店街活性化のまとめ役として活躍をする。

宮崎孝雄(みやざき・たかお)

横浜市経済局商業・サービス課長。「大学と地域をどうつなげるか」といった課題に対する行政側の責任者。

平田光子(ひらた・みつこ)

日本大学大学院グローバル・ビジネス研究科助教授。東海大学政治経済学部経営学科時代に5年半、研究会を通じて相模原市、秦野市の地域活性化を実施。

「21世紀の商店街シンポジウム」に参加して

横山千晶(センター所長)

九州にいた幼いころ、商店街は大きなびっくり箱だった。店先に並べられた色とりどりの果物、うるこをきらきらと光らせる魚。老夫婦の営む駄菓子屋さんは食パンや牛乳なども置いていて、朝早くほかの店が閉まっているときでも裏からたずねると牛乳を売ってくれた。客だからといって子供は子供。ときとして怒ってくれる怖いおじさんも商店街のおじさんだった。まさに商店街は生活の一部だった。今でも野菜と魚と豆腐を買うのは近くの商店街と決めている。そのせいか、さまざまな町を訪ねると、どうしても商店街が気になる。気になって歩いてみると、寂しくなることも多い。どの商店街も同じような顔になっている気がして仕方ない。しかし大都会で見慣れたチェーン店の間に地元のほっこりとした顔がのぞく瞬間は本当にうれしくなる。今回のシンポジウムはそんな悲喜こもごもの顔にいくつも出会った。商店街は大きな学校だ。そこでは人と人が語り合い、協力し合い、ときとして競い合い、そして工夫しあって自分たちを一から作り上げ、共に生きている。まさ

に大きなものづくりの場だ。成功もあれば失敗もある。学生たちは自らそのもの作りの中に入っていった。暖かく迎え入れてくれた商店街はすでに彼ら・彼女らの生活の一部だ。そんな中からどんな「21世紀の商店街」が生まれてくるのか。このシンポジウムは、そんな商店街の「始まり」だ。彼ら・彼女らの輝く目がそれを語っていた。だから「これから」に期待したい。

慶應義塾大学教養研究センター Report No.9

交流・連携セクション(担当：田上竜也)

2005年3月31日発行
代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
TEL : 045-563-1111(代表)
lib-arts@hc.keio.ac.jp
<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>